

水字貝を描いた盾形埴輪 すいじがい たてがたはにわ

調査：保津・宮古遺跡第14次調査

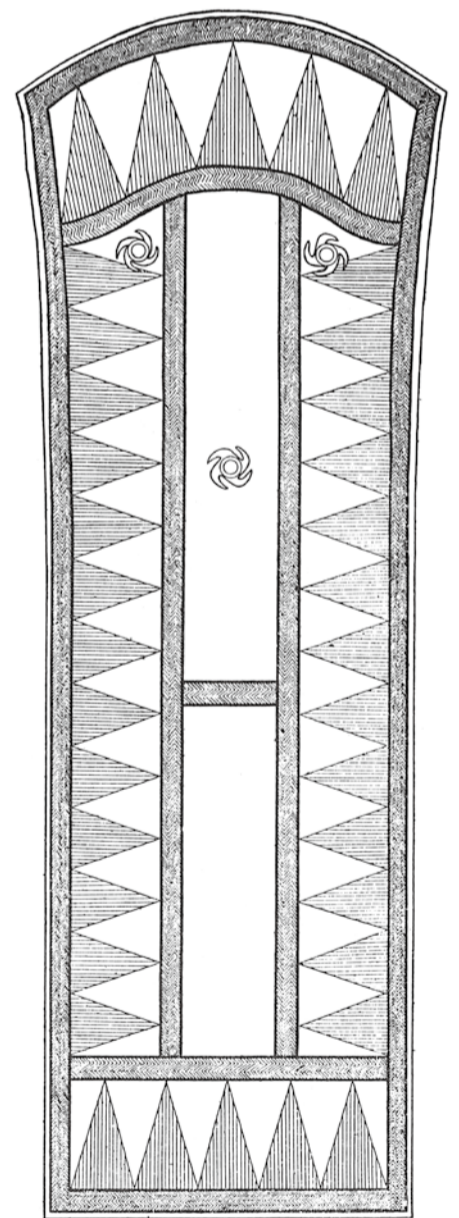
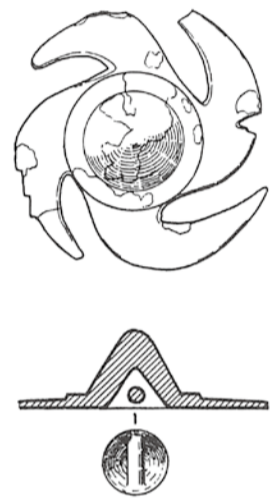
大きさ：縦 29.5 cm・横 28.6 cm

出土年：1995年

時代：古墳時代（5世紀前半）

保津・宮古遺跡は、田原本町西部に位置する縄文時代後期から近世に至る複合遺跡です。今回の資料の調査地は、保津・宮古遺跡の西南部にあたります。紹介する盾形埴輪は、方墳と推定される周濠から出土しました。ただし、古墳の墳丘は、古代の道路側溝によって削られ、周濠の底がわずかに残る程度でした。しかしながら、濠底からは、この盾形埴輪のほか、入母屋の家形埴輪（当ミュージアム第3室右側に展示）や高床の切妻建物の埴輪（本センター中央階段踊り場展示）などが出土しました。

この盾形埴輪は、円筒部に粘土板を貼り付け、盾を表現したものです。盾の周縁に外向きの鋸歯文、下半に対置する鋸歯文を線刻しています。特に注目されるのは、盾の中央部に水字貝と思われる絵画を描いていることです。和泉黄金塚古墳（大阪府和泉市）から出土した革盾には、水字貝を起源とする巴形銅器が付けられていました。水字貝には邪を祓う力があると考えられており、この革盾も古墳の主を守る重要な道具であるため、巴形銅器が付けられていたのでしょう。保津・宮古遺跡の盾形埴輪では、巴形銅器でなく、水字貝そのものを絵画で表現している点で重要な資料です。



和泉黄金塚の革盾と巴形銅器